
GDL-GLYD

石鍋 盥回し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GD-L・GLYD

【Zコード】

N4414F

【作者名】

石鍋 盤回し

【あらすじ】

そこは私達だけの秘密の場所だった。まるで「ハリウッド」のような、窮屈な場所。髭達磨。少し思い出したことがある。

それは私たちだけの秘密の入り口だった。
鉄筋鉄屑と、木つ葉と、得体の知れない水が染み出す大型家電。
昔は豪奢極まりなかつたに違いない一階建ての家の、成れの果て。
俗に言つて、『ゴミ屋敷』のような風景。

「ほら、行こうよ」

彼女は振り向き、手を指し伸ばしてきた。
顔は陰になつていてよくわからない。口元だけは、楽しそうに弧を
描いているのだとわかる。

自分はボクになつていて、何時だつてここでは子供に戻つている。
そして更に彼女が手を伸ばす。ボクの腕を掴み、倒れた緑色の冷蔵
庫の上へぐいぐいと引き上げる。

ここは彼女の家の庭の外れだった筈だ。

彼女の家の境界線を侵す、ゴミの山／アスレチック）だった筈だ。

沈み込む廃タイヤの山を飛び、伽藍洞になつたドラム式洗濯乾燥機
の殻を潜り抜け、格子状の竹垣を乗り越える。

するとモザイクの丘の向こうに見えていた家に辿り着ける。

また、ここに来たのだ、と思つ。前にいつ来たのかは知らない。た
だ、初めてではないと何かが告げている。

その家の入り口は『三つ』。

一つは自動扉みたいに透明な壁。

もつ一つは木製、ぼろぼろの観音開き。

後は。

ボクは透明な壁に肩を押し付けた。じいんと、電気が流れたような感触。ちらりと見やると、透明な壁越しに、透明な玄関のようなもの、透明な壺、透明な靴、透明な絵、透明な……目がチカチカした。

「うふふふふ」彼女が笑う。何処からか用意したノッキングチェアに座りながら。

ボクはしごれた肩を壁から離し、顔を背けてそこを、一度叩いた。

今度は木製、ぼろぼろの扉だった。
くすんだ金属色の丸ノブを掴む。ノブを回せども回せども、扉は開かなかつた。

ベコリ、とノブが凹む。

ボクは人差し指の、そろそろ切ろうと思つたままほつたらかしで大分伸びた爪でもって、ノブをつつく。

ヂヅン。ヂヅン。と、見た通りのくすんだ金属色の音が出た。ブリキだ。

「あはははは」彼女がいよいよ愉快そうに、お腹を抱えて身をよじる。

少し悔しくて、少し恥ずかしくて、何やらボクは口を尖らせたりして、文句のようなものを言つたのだと思う。

すると彼女はふわりと椅子から下りて、壁にめり込んだ食器棚の下

部の引き戸を開いた。

食器棚の背板にはぽつかり穴があいていて、家のなかに通じている。そうだった。そういう仕組みだった。思い出してしまえば大したことじやなかつた。

中に入ると、だだつぴろい一部屋。外にあるようなものは一切ない、床から壁から全部リノリュームの、四角い部屋。

部屋の隅からぐるりと、壁伝いに四角い螺旋の通路がある。

不意に上から、銅鑼を叩きましたような、或いは雷を封じた鞠をついたよつた音が響いた。

ボクは不思議と、全く理解できないのにそれがこの家の主の誰何の声なのだと知つてたけど、どう返事をしたらよかつたのか思い出せない。

腕を組んで暫く考えていたら、彼女がボクの腕組みをほぐした。手を引かれて、四角い螺旋通路を駆け上がる。

また轟いた音に、ボクは一瞬躊躇つたけれど、よく聞いたら今度のそれは、ボク達を呼んでいるの風情の音だつた。

延々登り続けてやつと辿り着いたそこには、またガラクタばかりで、矢鱈と理路整然と詰め込まれたガラクタ達が、どんなに詰め込まれても誤魔化しきれない体積の加算で、一つ一つが高密度の壁めく様相で、部屋を内へ内へと圧迫していた。

窮屈な部屋の真ん中には「タツ」。ほつそりしたざんばら髪の無精な髭だるまが座つている。

部屋のガラクタに紛れた何処かにラジオが幾つか有るらしい。

声。

「あな……いつだつ……そつー」

ノイズ。

ノイズ。

声。

「私が言つて……」となんて……」

髭だるまの正面にはテレビがあつて、それも操作していないのに勝手にチャンネルが変わる。きっとガラクタにリモコンが埋もれていて、ボタンが押しつばなしなんだ。

砂嵐のよつな画面。

女が男にがなりたてるシーン。

揺らぐノイズ。

何かが碎けるシーン。

砂嵐。砂嵐。砂嵐。

ノイズにまみれて、ふと顔を上げる。

彼女は隣に居なかつた。

背筋に走る悪寒に、今度は髭だるまに振り返つた。

誰も居ない。

ボクノワタシ）しか居ない。

ノイズ。

もうテレ비なのか、ラジオなのかわからない。
ぼわぼわと、輪郭が白く滲む。

「だつて、一周年じゃない！ずっと準備していたじゃない！」

叫んでいた。

「楽しみにしていたのこつー。」「貴方なんて、」

なんてヒヤイコトバ。

ああ、これは。

これは、夢なのだと、急激に冷めていく身体が教えてくれた。

ブツリ、

ブラックアウトした画面の中に、ワタシ／彼（の顔が映り込む。

「嫌だ、嫌だよ、宗次」

肩を抱いて、うずくまる。確かに抱いているはずの自分／宗次（が砂になつて消えていく。

「独りは嫌だ、嫌だよ」

浮遊感が襲い掛かつてくる。

きつと、このまま浮き上がれば終わつてしまつと想つた。
終わりを見なればならな」と思つた。

この全てを、忘れてしまつような気がしたから。

「嫌、……だ」

頬に水気があたる。湿つた枕が気持ち悪かつた。
身動きと共に、はらりとタオルケットがベッドから落ちた。

うろんな頭のまま身体を起しす。

カーテンの隙間から西田が細く差し込んできていた。

テーブルの上には彼との一周年記念の『馳走の準備がしてある。

「ん……」

もぞりとベッドの横で何かが動いた。

ツナギのまま、慌てて帰ってきたのだろう。仕事着をぐしゃぐしゃのシワだらけにする盛大な寝相で宗次が横になっている。少し、汗臭い。

『だから『めんつて』言つてるだろ？先方さんのお陰で急に仕事はいつちまつたんだからよー何とか早く切り上げてくるから勘弁してくれよ』

朝、ろくに振り返りもしないまま、玄関でそつ宗次が言つたのを思い出す。

そつ、私はビデオテープを言つたんだ。

ノイズ。

胸に夢が突き刺さる。

「ふつ…………つ、うつ」

何かが壊れたように、涙が溢ってきた。
何か大事なことを忘れてしまったような。
何か大切なものを無くしてしまったような。
あの荒唐無稽な夢が。
眠る宗次の横顔が。

それが何かを理解できないのに、無性に何かが哀しかった。

「ん……。紗夜……泣くなよ
ベッドの下から手がのびてくる。目を醒ましたようだ。

「今日は俺が悪かった。だから、泣くなよ
その指が私の目元を拭う。

「これ……は……うつうつ、違、つひ

「ごめん、紗夜」

「めん。

もう一度宗次は小さく耳もとで囁いて、私の頭を抱いた。

「「」めん、な、そこ……つ」

「「」めんな、紗夜」

「宗次……「」めんなさい……」

「わかった。だからもう泣くなよ、ごめん、紗夜」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4414f/>

GDL-GLYD

2011年1月22日03時05分発行